明治学院は2013年　創立150周年を迎えます

■目次

●巻頭言:『明治学院百五十年史』の編集状況　遠藤興一・・・・1
●明治学院歴史資料館講演会要旨『アメリカのヘボン-イースト・オレンジにおいて-』　渡辺英男・・・2－4
●随想:明治学院チャペル　平林武雄・・・4－6
●2011年度寄贈資料・購入図書・・・6－10
●寄贈資料・購入図書紹介・・・10-12
●2011年度歴史資料館活動・・・12
●アメリカ史料調査出張報告　辻直人・・・13－14
●歴史資料館所蔵資料を「活用」する――博物館実習での試み　熊澤弘・・・14-15
●歴史資料館資料集・歴史資料館グッズ紹介・・・16

巻頭言:『明治学院百五十年史』の編集状況

『明治学院百五十年史』編集委員長　遠藤興一

編集委員会が立ち上がって数年が経ちます。最初は足並みがそろわず、委員各位の努力が刊行に焦点化しにくい時期もありましたが、昨年春あたりから、執筆に拍車がかかり、分担執筆の原稿が事務局に順次提出され、それを編集し、内容の調整、コラム、写真等の選択へと、作業は目下順調に進んでいます。総頁数はまだ確定できる段階ではありませんが、『明治学院百年史』よりは大分厚いものになるでしょう。内容も多岐にわたり、幅広い世界が展開される筈です。

既に学内には報知されていますが、通史篇と課題篇の二部から成り、前者は従来の学院史をヘボンの来日まで遡り、『明治学院百年史』以後の事柄にもページを多くさいています。課題篇はいまだ原稿執筆途上ですが、執筆担当者は大いに努力しているところ。こちらは、東アジア、文学、芸術・スポーツ、音楽という分野で活躍した学院関係者を人物史的にまとめています。通史篇も宣教師や教師、さらに同窓生の活躍に焦点をあてていますから、全体としてみれば、「人から人につなげた」学院史という特徴が前面に出てくることになります。

作業途上のことで、全体像をはっきりと説明できないのは残念ですが、ヘボンにはじまり、DO・FOR・OTHERS を掲げる今日に至るまでの学院をキリスト教主義教育の原点に立ち返って検証する筋道がしっかりたどれるとよいのですが・・・・。

なお、歴史的な正確さとともに、読み易さ、判り易さもねらいとして編集しています。ビジュアル化についても更なる努力を重ねたいところ。

明治学院記念館:1890年竣工。明治学院教員であった H.M.ランディスの設計と言われる。建設当初は神学部校舎兼図書館。その情景は明治学院普通学部第1回卒業生 島崎藤村の『櫻の實の熟する時』にも描かれている。藤村が描いた２階の図書閲覧室は、現在は会議室として使用されている。建設当初は煉瓦造り２階建ての建造物だったが、1894年６月の地震により１階煉瓦造り、２階木造連繋構造へと改修された。その後も幾度かの改修を重ねながら今日に至っている。歴史資料館はこの記念館2階にある。

明治学院歴史資料館講演会要旨（2011年11月19日開催）

『アメリカのヘボン-イースト・オレンジにおいて-』

Dr. Hideo Watanabe（渡辺英男）

William Paterson University, NJ, USA

イースト・オレンジの場所と歴史

ヘボンのアメリカの生活は、生まれ故郷、ペンシルバニア州のミルトン、開業医をしていた頃のニューヨーク州のマンハッタン、そして隠棲生活を送ったニュージャージー州のイースト・オレンジに分けることができる。私は現在、同じニュージャージー州に住んでいる関係で、イースト・オレンジのヘボンを調査研究した。

まずイースト・オレンジの場所であるが、州の北東部に位置し、マンハッタンから車で30分ぐらいである。イースト・オレンジはオレンジから分かれてできたが、オレンジの起源は、1666年にイースト・オレンジのあるパサイック川の河口に、清教徒が「神政な社会」の町を作ろうと移り住んだことに由来し、宗教は地域の社会形成に大切なものであった。

写真 1:イースト・オレンジの位置を示すニュージャージー州の地図

ニューヨークの飛躍的な発展の影響を受け、ヘボンが住んだ(1893－1911)頃のイースト・オレンジは急成長の途上にあった。その後、1950年のイースト・オレンジ市の平均収入は米国で9番目で、全米的に注目を浴びる町であった。しかし1967年にアフリカ系アメリカ人が多く住むニューアークで人種問題にまつわる暴動が起き、それをきっかけに町は大きく変貌した。白人が町から流出し、2010年の人口、6.5万弱のうち、約90%がアフリカ系アメリカ人である。

ウイリアム通りとグレンウッド街

ヘボンはニューヨークを去って日本に住んだ後、1893年の5月にイースト・オレンジに着くと、384 William Street に仮住まいする。ニューヨーク時代の教会の牧師であったラウリー博士の家はすぐ近くである。その後ヘボンは71 Glenwood Ave.に移り、1911年に亡くなるまでそこに住む。

「ヘボン邸」の歴史

「ヘボン邸」とはヘボンがイースト・オレンジ時代に住んだ家を意味する。(その後、家の改築が、例えば、マーサによって行われている。)グレンウッド街71番地の1867年の不動産譲渡記録が見つかり、「ヘボン邸」は現在から遡り150年近い歴史の古い建物であることがわかった。ヘボンは1893年にコックスから8,000ドルで家を購入している。1911年のヘボンの死去とともに「ヘボン邸」はサムエル・D 息子夫妻に自然譲渡される。その後、沢山の人の手に渡り、1954年からマーサ夫人の所有である。

「ヘボン邸」の建物

「ヘボン邸」は、正面はグレンウッド街に面し、側面はパーク街が走っている。敷地は横幅15.2メートル、奥行き45.2メートルで、地上3階、地下 1 階である。1階は玄関を入るとロビーがあり、右横に居間がある。その奥がダイニング・ルームになっており、左横がキッチンである。2階には寝室が4室とバスルームがある。3階は二つの居室とオープン・スペースになる。そして地下は広い空間の中央部にボイラーが備えられている。

写真2：現在の「ヘボン邸」の外観—講演では、配置図と1，2，3階、地下の平面図を紹介した。

イースト・オレンジでの生活

NY州オレンジ郡のキャンベル・ホールに住んでいた弟、スレーターが1895年に亡くなると、未亡人のアンナと息子のサムエルがイースト・オレンジにやって来る。その後、サムエルの娘のエイミーも近くに住むようになる。またラウリーの家も、ブリック長老教会も「ヘボン邸」から徒歩10分の近くにあり、晩年のヘボンは親戚、友人に囲まれて住んでいたようである。妻、クララは精神病を煩い、ペンシルバニア州ワーナーズビルにあるグランドビュー療養所で静養し、その後、イースト・オレンジ近郊の精神病院に入院し、1906年3月4日に永眠する。

ブリック長老教会

1831 年にブリック長老教会ができ、イースト・オレンジの中心地として栄える。教会の前方にブリック教会駅があり、イースト・オレンジ駅はニューヨーク寄りの次の駅となる。ヘボンは長年長老を務め、1911年9月21日に亡くなる。ブリック長老教会は2002年に解散し、現在、Temple of Unified Christian Brick Church というバプテスト教会になっており、アフリカ、ハイチ、ドミニカ系の信徒が多い。

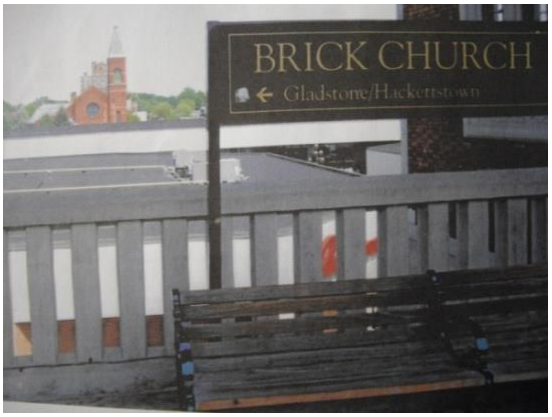


写真 3：ブリック教会駅とブリック教会

ローズデール墓地

ヘボン夫妻はニューヨーク時代に、チャールズ、ウオルター、カーティーの3人の男の子に恵まれたが、それぞれ5歳、2歳、1歳で亡くなり、オレンジ市にあるローズデール墓地に葬られている。その墓地にはヘボンとクララと子供の個人の墓石に加えて、ヘボン家全体の墓碑と明治学院創立110周年記念の黒い石碑がある。さらに墓地中央には弟のスレーターと彼の一族（妻のアンナ、サムエル B 夫婦、孫娘のエイミーとドリー）の墓石もある。

何故、ヘボンはイースト・オレンジを選んだのか

ヘボンは帰国後、ニューヨークには戻らなかったが、広い米国の中で、イースト・オレンジを選んだのは何故であろうか。理由は三つ考えられる。一つはイースト・オレンジにある「ヘボン邸」から歩いて行ける子供の墓の存在である。ヘボンは横浜にいる間に「もし主が赦しを給うならば、そのうち故郷に帰って、かわいい子供たちの墓のところにわたしの骨を横たえたいと思っています」と述べている。子供を最初に埋葬したのは1852年で、ヘボンがニューヨークに住んでいた頃である。突然の死に際し、夏の暑い時期のローズデール墓地の選択は偶発的であったかもしれない。

次は自然環境である。ヘボンの手紙に「このイースト・オレンジの美しい町を歩くのが楽しみです。この町の街路は広く、人道は舗装してあり街路樹も植えてあります。町外れには小高い山があり、樹間には多くの立派な邸宅や庭園があります」とある。ヘボン夫妻はニューヨークに居た頃、子供の墓参りに出かけ、そのイースト・オレンジの光景は、33年の長い日本滞在後も夫妻の眼に焼きついていたのかもしれない。

三つ目は、イースト・オレンジが宗教性の強い土地であったことが考えられる。町は清教徒の「神政な社会」建設を起源とし、10.2平方キロの面積に12の教派による47の教会があった。沢山の教会と潤いある宗教心を持つ人達が住む環境は、敬虔なクリスチャンであるヘボンの心をひきつけ、その地に永住する気持ちを揺るがないものにしたのかもしれない。（了）

講演は OHC を活用して、視覚にも訴えながらすすめられた。

□2011年1月、明治学院大学名誉教授　平林武雄先生が100歳という長寿を全うされ、天に召されました。明治学院を愛され、明治学院の「生き字引」とも言える先生が遺された手稿の中から１篇、明治学院礼拝堂について記された一文をここに掲載し先生を偲びたく思います。

随想：明治学院チャペル　　平林武雄

明治学院チャペル北側の外壁には「大正四年　1915」と刻んだ白い石がはめ込んであるこの年は定礎の年であって堂完成の年ではない。詳しくは大正四年十月二十九日に定礎式を行ない、翌大正五年三月二十七日卒業式の当日併せて献堂式を行なった（『明治学院五十年史』四二一ページ）。当初の建坪と什器については、「面積は大略奥行百尺幅五十尺、床には一〇四脚の腰懸けを備え四百六十八名の生徒を収容すべく、内部の廊下には二階をしつらえそこに尚二十脚の腰懸けを並べられ候へば更に八十名乃至百名の生徒を入れ得べく候」という報告も残っている（同書四二二ページ）。

さて横にまわってみると、入口に英語でチャペルと書いた表札が打ちつけてある。これは終戦直後松本亨氏がアメリカの宣教師として帰国し学院総主事に就任した時、外人の訪問客の便宜のため構内の目ぼしい建造物にそれぞれ英語の表札を付けたその名ごりである。それ以来現在に至るまでチャペルと呼ばれており、それはそれとして正しいけれど、建築当初から戦前まで公には講堂と称して来たことだし、学院史も講堂で通しているようだから、ここでも講堂と呼ぶことにしたい。

礼拝堂を講堂と称したのはキリスト教をかくしたというほどのことではない。事実この建物は学院の礼拝や伝道講演会のほかに、音楽の授業や演奏会、生徒活動による雄弁大会、英語コンテスト、マンドリンやハモニカの演奏会、そして映画や演劇の上演さえ許したのである。大正初期と言えば、まだ青山会館、日本青年館、日比谷公会堂などが建ったか建たないかという時期であった。戦後大磯にサンダース・ホームを作って有名になった沢田（岩崎）美喜さんは明治学院のこの講堂で結婚式を挙げたとか聞いたが確認されてはいない。

講堂に入ろう。大正十二年私が中学部に入学したはじめ、この講堂へ靴のままはいれるということはちょっとした驚きであった。われわれ新入生は手にインキ壺とペン軸、鞄には先ず靴カバーを押し込んで登校したものである。インキとペン持参というのは当時鉛筆の質がまだ悪くて提出物には不向きであり、万年筆は高価でだれも買えるものではなかったから。で、校舎に上がるには先ず入口で靴の泥を落とし（雨の日は靴を洗う）、靴にカバーをかけて教室に入るのであった。それなのに講堂は靴ばきのままでよいというのは妙であった。席は、下級生が階下、五年生がギャラリーに上がれるので、これが羨ましかった。照明をいえば、さすがガス灯の時代は去っていたが、長年ランプやガス灯のうす暗さに慣れていたのであろう、電灯といっても弱い電球が両側の壁にともっているばかりであった。

正面の講壇には数脚の椅子が並んでいた。なかなか品格のある重そうな椅子であった。アメリカから取り寄せたものに違いない。椅子の脚が長いのである。井深先生は容貌も体躯も立派であったが、当時の典型的日本人で脚が短い。椅子に掛けられると爪先きは辛うじて床にふれているけれど、かかとは上がったままという状態で、わ

れわれ生徒は下から見上げていて何か落ち着かなかったことを覚えている。ピーク先生など外人宣教師は長い長い脚をもてあますかのように、のばしたり組んだりしている―

講壇の下、向かって左に、当時日本ではまだ珍しかった威風堂々たる「オルガン」ハーモニウムがすえてあった。現在記念館に収めてあるこの大オルガンは大正三年に購入した米国メーソン・ハムリン会社製、鍵盤が二段あり、足で踏むペダル鍵盤もある。それで奏者の両手はもちろん、足もふさがっているから、当然大型ふいごで空気を入れる人手が必要となる。（電動装置となったのは昭和十年代のこと。）オルガンの横には、手押しポンプの取っ手のような長い棒がつき出ていて、屏風ようの目かくしの向こうで小使いさんがそれをこいでせっせと空気を入れる仕掛けになっていた。中学では日本史の教科書に出てくる山田長政に似た大久保さんが係りでそのポンプをこぐ。屏風の上に大久保さんのはげ頭が出たりはいったりするのが面白い。たとえば新渡戸稲造氏などが来て、いつ終わるとも知れぬ長談義が続くときなど、疲れはてた中学生にあのリズミカルなはげ頭の出没は天来の慈雨ともいうべき有りがたい気晴らしであった。その忠実で親切な大久保さんも時には不覚な居眠りにおちいることもあり、あわてたオルガニストがとんとんとノックするのはそういう時であった。

さて、現在講堂の東側と西側に三■ずつ突き出ている袖ははじめからのものではない。あれは昭和二年の高等学部商業科が独立して高等商業部となり、一方中学部も急速に膨張したための教室不足を補う窮余の策として建て増したものである。設計にも資材にも注意を払ったのであろう、継ぎ足しと気付かぬ人が多い。従来の講堂本体と建て増し部分との継ぎ目にはアコーディオン式のスクリーンを取り付け、建て増し部分には簡単な机板のついた腰掛けを備え、黒板を入れて数十名収容する教室とした。現在教室としては使われていないようだが、当時は鐘の音が聞こえないといって敬遠された。

それやこれやで講堂の腰掛けが不揃いとなったばかりでなく、昭和八年東山学院合併で持ち込まれた腰掛けも若干あり、ますます貧乏くさく見苦しくなった。

高等商業部は昭和十年四月から第二部（夜間部）を開設した。そのため構内に電灯を増しひときわ明るくなった。講堂も明るくなった。

ギャラリーは不測の事故をおそれ、座席数だけしか入ってはいけない、「立ち見禁止」を厳命した時期もしばらく続いたが、そうとばかりも言っていられなくなり、ギャラリーを支える支柱を立て、その機会に幾分せり出して座席数をふやした、と記憶する。多分昭和十年代のことかと思う。余りせり出すと階下後尾の席を圧迫するという反対論があったと思うから、私の記憶ちがいではないであろう。

この講堂は音響効果が悪く講壇からの声が後方までとどかないという批評や苦情がはじめから絶えなかった。もちろん拡声機（マイク）が実用化してない時代である。それで講壇の前上部にひさし状のもの（反響板というか）を取り付けたことがある。これも昭和十年代のことか。費用もかけ見かけも立派なものが出来たが余り効果はなかったようだ。声が通らないという苦情は全く絶えなかったが、それも人によりけりで、藤原義江氏が母校を訪ねて来て歌った時、その声は堂内に響きわたり、賀川豊彦氏の熱誠あふれる講演は、氏のしゃがれ声にもかかわらず、満堂水を打ったように静まり傾聴せぬ者は無かった。井深梶之助先生は八十歳を越えても学院の主要行事に招かれて祝禱をされるのが恒例であったが、さすが会津松平公の小姓を勤め、武芸百般を修練した人だけあって、気力のこもった美しい声の祈りは最後尾の席まで届いた。当時の暴れん坊の生徒が三十年も後のクラス会でかくし芸と称して「祝禱をします」と前置きし、井深先生の祝禱を一言一句再現して一座の者を驚かせたこともある。

講堂東側の大窓には一部ステンド・グラスがはまっている。あのクリーム色のガラスはアメリカ在住某氏の寄贈である。はじめあの窓は全部がクリーム色のステンド・グラスであったが、昭和四十三年「大学紛争」の時暴徒の投石によって大方割られてしまい、無きずのもの僅か数枚を残すばかりとなった。いま十字形を成している部分がそれである。「残り物で十字架か」などと失礼なことは申し上げないが、当時を知る者には無残な連想を払い切れない。この際全面とりかえてはどうであろう。

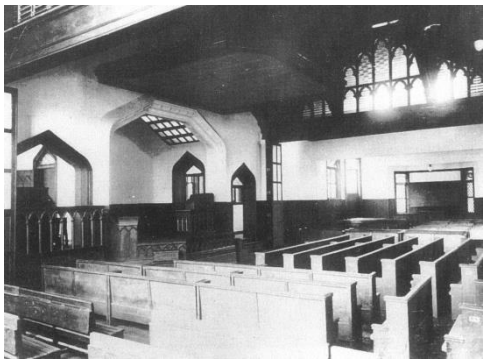
東南隅の小室は講演者・出演者などの控室としてはじめからあったものだが、昭和十三年「御真影奉戴」の時あ

らためて整備し大型金庫（？）をすえ、万一の時外部へ通じるように南側壁ににじり口ほどの出入口をあけ鉄扉をつけ梯子をかけた。だいたい明治大正を通じて国公立諸学校では独立の奉安殿を造り、付近を通る教職員生徒はみな立ち止まって脱帽敬礼したものだが、明治学院の奉安所は全く目立たぬ存在で、教職員も数名のほかは伺い知ることも許されず、むろん敬礼して通る者はなかった。よくもこれで当時の文部省が承認したものと、私は当時から今日まで不思議に思っている。御真影は昭和二十一年監督官庁に返納したのち書類倉庫となった。

講堂南側外壁に付いているヘボン先生肖像のプラーク。これはある年の卒業生一同が卒業記念として寄贈したもののように覚えているが定かでない。戦前か戦後かも分らない。学院の新聞には出ていることだろう。なお、このあたり、つまり講堂の南側には、大正十四、五年までテニス・コートがあり、講堂との間には桜の大木があって春はあふれるばかりの花をつけた。私の手許に写真がある。

この際念のために記しておこう。講堂東南外側に「ヴァベック博士記念」と英文で刻んだ石が立っているが、これは講堂とは何の関係もない。昭和三十年ごろ当時の院長単独の思いつきで、たまたまあり合わせた古木の下に功労者記念の石を置いただけのことである。同様にヘボン、ブラウン両宣教師の石も置いたが今は見つからない。

（1995.11.7.記）



礼拝堂袖廊拡張後の内観。上部中央が反響板。

編集部注：平林先生文中5頁で■とした部分は、原文ではひらがらの“つ”をかんむりにして漢字の“固”を書いた文字のように見える。“箇”とも“面”とも思わるので、編集上は不明文字として■で表示した。

平林武雄先生略歴：1910.9.30-2011.1.11　明治学院中学部・高等商業部卒業。１９３６年より明治学院に奉職。文部省中等教員英語科検定試験に合格して中学部教諭となり、高等学部教授、大学教授となる。明治学院勤続４０年、１９７６年３月定年退職。同窓会副会長、『明治学院百年史』委員会第３次委員長を務める。賀川豊彦の伝道をきっかけとして１９２７年受洗。日本基督教団白金教会員として教会生活を送る。専門はミルトンなど英詩・英文学。詩人、児童文学者としても活躍された。

1980 年頃の平林先生

２011年度寄贈資料・購入図書

本年度も歴史資料館への沖野佳子様からの指定寄付金により沖野岩三郎著作・島崎藤村史料を購入することができました。また明治学院に縁の方より多くの貴重な資料・図書を恵贈いただきました。ここに感謝とともに、購入図書、恵贈資料をご紹介させていただきます。

■沖野佳子氏寄附金による購入図書等

・島崎藤村自筆原稿『「藤村讀本（第三巻）」はしがき』
・『混沌』沖野岩三郎著，大阪屋號書店，1924.3. 5 版
・『山の子ざる』沖野岩三郎著，金の星社，1956.3. 初版
・『鹿持雅澄とその時代』沖野岩三郎著，起山房，1943.5. 初版
・『大人の讀んだ小學國語讀本』沖野岩三郎著，盛林堂，1940.9. 初版
・『兒童文學』沖野岩三郎、松村武雄、西條八十著，文化生活研究会，1927.12. 初版
・『赤い猫』沖野岩三郎著，金の星社，1934.3. 5 版
・『英傑サウル』沖野岩三郎著，金剛社，1922.4. 初版
・『小諸義塾と木村熊二先生』木村先生記念碑事務所，1936.10. 初版

・『笛吹川』沖野岩三郎著, 金の星社, 1926.10. 初版
・『童話読本:一年生』沖野岩三郎著, 金の星社, 1932.6. 20 版
・『童話読本:二年生』沖野岩三郎著, 金の星社, 1936.6. 初版
・『童話読本:六年生』沖野岩三郎著, 金の星社, 1941.11. 12 版
・『童話読本:小学五、六年生』沖野岩三郎著, 金の星社, 1954.1. 初版
・『やんばうさん(5)』沖野岩三郎著, 主婦之社, 1934.5. 初版
・『労働の少年』沖野岩三郎著, 金の星社, 1926.4. 初版
・『日本の兒童と藝術教育』沖野岩三郎著, 金の星社, 1925.11. 初版
・『あゝ島中雄三君』森永次郎編、湯川龍造(私製), 1942.9. 初版
・『久保典子遺稿集』沖野岩三郎編, 久保もと(私製), 1930.8版
・『地球は曇る』沖野岩三郎著, 大阪屋號書店, 1928.9. 初版
・『私は生きてゐる』沖野岩三郎著, 大阪屋號書店, 1925.6. 初版
・『黒船物語』沖野岩三郎著, イデア書院, 1925.2. 初版
・『どんぐり山』沖野岩三郎著, 前田出版社, 1946.10. 初版
・『話題手帳』沖野岩三郎著, 四條書房, 1934.8. 初版
・『宛名印記』沖野岩三郎著, 美術と趣味社, 1940.5. 初版
・『基督新教縦斷面』沖野岩三郎著, 警醒社書店・和田弘榮堂, 1920.4. 初版
・『歐州物語』沖野岩三郎著, 四條書房, 1933.11. 初版

『黒船物語』の装丁:本体(左)と函(右)

■寄贈図書
・『約翰上中下書』秋山憲兄著, 新教出版社, 2000.11. 初版(秋山憲兄氏より)
・『本のはなし:明治期のキリスト教書』秋山憲兄著, 新教出版社, 2008.11. 増補改訂版(秋山憲兄氏より)
・『日本キリスト教史年表』秋山憲兄著, 教文館, 1988.4. 初版(秋山憲兄氏より)
・『神による新生』賀川豊彦, 福音書館, 1929.10.8. 初版(稲垣昌芳氏より)
・『世界國家』創刊号　賀川豊彦, 国際平和協会, 1946.1. (稲垣昌芳氏より)
・『基督に倣ひて』トマス・アケンピス著　中山昌樹訳, 新生堂, 1924.4. 初版(小杉義信氏より)
・『聖アウグスティヌス懺悔録』中山昌樹訳, 洛陽堂, 1911.11. 初版(小杉義信氏より)

■寄贈資料
・安部正義関係資料(ご令息、安部正春氏より)　(リスト作表は、歴史資料館研究調査員　加藤拓未氏による)

作品	作詞	資料の種類	ジャンル	作曲年
【オラトリオ】				
『ヨブ』	安部正義	自筆譜	オラトリオ	1964
『ヨブ』	安部正義	自筆草稿譜	オラトリオ	1964
『ヨブ』	安部正義	印刷パート譜	オラトリオ	1964
『ヨブ』	安部正義	出版譜	オラトリオ	1964
【ピアノ作品】				
Recollection (1)	—	自筆譜	ピアノ曲	1919
Recollection (2)	—	自筆譜	ピアノ曲	1919
Under the Moonlight (1)	—	自筆譜	ピアノ曲	1919
Under the Moonlight (2)	—	自筆譜	ピアノ曲	1919

【ピアノ作品】 つづき				
Sonatina No.2	—	自筆譜	ピアノ曲	1921
たそがれ（Twilight）	—	自筆譜	ピアノ曲	?
Andante appassionato	—	自筆譜	ピアノ曲	?
Allegro non troppo	—	自筆譜	ピアノ曲	?
Sonatine No.24	—	自筆譜	ピアノ曲(4 手)	?
【歌曲】				
秋夜	安部正義	自筆譜	歌曲	1915
谷の百合(1)	安部正義	自筆譜	歌曲	1916
谷の百合(2)	安部正義	自筆譜	歌曲	1916
谷の百合(3)	安部正義	自筆譜	歌曲	1916
谷の百合(4)	安部正義	自筆譜	歌曲	1916
谷の百合(5)	安部正義	自筆譜	歌曲	1916
悲歌（A Lament）	P. B. Shelley	自筆譜	歌曲	1916
The Dance of Mars	Robert B. Pike	自筆譜	歌曲	?
Remembrance	Lord Byron	自筆譜	歌曲	?
おお逝きぬ我がいとし子	安部正義	自筆譜	歌曲	1924
あほうどりの歎き、人魚の歎き	近藤英次郎／小栗房子	自筆譜	歌曲	1925
小馬	小出正吾	自筆譜	歌曲	?
りんご	小出正吾	自筆譜	歌曲	?
りんご	小出正吾	印刷	歌曲	?
栗の実	小出正吾	自筆譜	歌曲	?
榧の実	島田忠夫	自筆譜	歌曲	?
圍呂裡	島田忠夫	自筆譜	歌曲	1935
夜話	島田忠夫	自筆譜	歌曲	1935
主の祈り	—	自筆譜	歌曲	1960
家路へ	?	自筆譜	歌曲	?
アムンゼンを迎ふ	報知新聞社編集局編	印刷	歌曲	1926
元二の安価に使するを送る——徳川義親侯に捧ぐ	王維	自筆譜	歌曲	1935
【合唱】				
華厳の瀧	高橋箒庵	自筆譜	混声四部合唱	1934
歓喜の音信	?	印刷	混声四部合唱	1935
詩篇第 42 篇	—	自筆譜	混声四部合唱	?
春やいづこに	島崎藤村	印刷	三部合唱	?
婚姻の祝の歌	島崎藤村	印刷	混声四部合唱	?
キャンプ	小河原虎三	印刷	混声四部合唱	?
ハイキング	塩野幸子	印刷	混声四部合唱	?

【学園関連】				
東北学院五十年記念歌	長谷部俊一郎	自筆譜	学園歌	?
東北学院五十年記念歌	長谷部俊一郎	印刷	学園歌	?
日本洋楽学園園歌	安部正義	自筆譜	学園歌	
トキワ松学園校歌幻想曲		自筆譜	合唱、ブラス	1967
【台本】				
The White Fox: Fairy Drama in 3 Acts.		自筆	台本	?
The White Fox: Fairy Drama in 3 Acts.		タイプ打ち	台本	?
【編曲】				
明治学院校歌		自筆パート譜		
明治学院高等商業部部歌		自筆パート譜		
讃美歌 32		印刷	混声四部合唱	
たへなる道標の		自筆譜	混声四部合唱	
ハイドン「はてしもしられぬ」		自筆譜	2 声部	
はにふのやど（讃美歌 435）		自筆譜	2 声部	
荒城の月		自筆譜	混声四部合唱	
荒城の月		印刷	女声六部合唱	
Home Sweet Home		自筆譜	歌曲	
The Last Rose of Summer		自筆譜	歌曲	
シューベルト『冬の旅』より"Leise flehen meine Lieder"		自筆譜	2 声部	
Godfrey Marks 作詞作曲"Sailing"		自筆譜	歌曲	
Longfellow"The Arrow and the Song"		自筆譜	混声四部合唱	
Longfellow"The Arrow and the Song"		印刷	混声四部合唱	
きよしこの夜		自筆譜	混声四部合唱	
オラトリオ『ヨブ』の序曲		自筆譜	4 手鍵盤楽器	
オラトリオ『ヨブ』の間奏曲 I		自筆譜	6 手鍵盤楽器	
オラトリオ『ヨブ』の間奏曲 III		自筆譜	鍵盤楽器	

・松尾造酒蔵関係資料（ご令息　吉岡繁氏より）：神学論文（未公刊）ノート他
・大内三郎関係資料（秋山憲兄氏旧蔵）：植村正久研究ノート他
・賀川豊彦資料（小川久太郎氏より）：墨筆色紙2点
・藤原義江資料（稲垣昌芳氏より）：藤原義江生誕100年記念切手　80円切手10枚1シート（1998年発行）
・岸田吟香（精錡水関連）資料（稲垣昌芳氏より）：讀賣新聞　明治十一年二月八日　第九百十五號

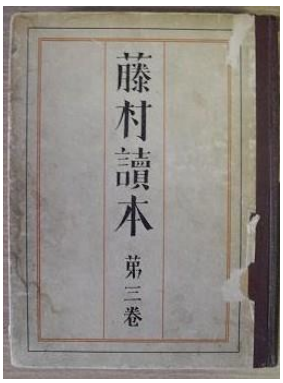
■歴史資料館購入図書及び資料　2011年度予算で購入した図書・資料の一部を紹介いたします。
・『和英語林集成』 第2版上海版第1刷　1873年　（松平家所蔵印押印）
・『牧會漫談』 田村直臣　大正幼稚園出版部　1928.9.（非賣品）　田村直臣聖職五十年記念出版
・時の論叢書7『友よ戦場に心伍して』 田川大吉郎　教文館　1942.2. 初版
・『日本基督教婦人矯風会　会歌』 作詞：青木歌子　作曲：大塚淳　日本基督教婦人矯風会　（作曲年不詳）

・『ビーチャル』 松村介石　警醒社書店　1893.5.　初版
・『自叙　益田孝翁傳』 長井實　成武堂印刷書　1929.11. 再版
・高橋是清遺著『経済論』 高橋是清　千倉書房　1936.5. 初版
・『立憲改進党綱領六個条政談演説筆記』 沼間守一他　東京嚶鳴社　1883.12. 初版
・『人性論/名人学』 アメルマン著・井深梶之助訳　明治学院神学予科　1886.10.
・『世界冒険譚第5編　決志少年』 櫻井鷗村訳　文武堂　1900.12. 初版　＊本書表紙では「決(決の俗字)」が用いられている。
・『近代思想と實生活』 岩野泡鳴　東亞堂書房　1923.11. 初版
・『飯倉だより』 島崎藤村　アルス　1922.10. 初版　（島崎藤村署名入り）
・『南風に競ふもの』 賀川豊彦　博文館　1928.1. 初版
・『随筆集野客漫言』 馬場弧蝶　書物展望社　1933.9. 初版　（馬場弧蝶署名入り）
・『新約聖書譬喩畧解』 安川亨訳　東京十字屋書舗　1881.5. 初版
・『廃娼之急務』 島田三郎・木下尚江合著　東京博文館　1900.10.　初版
・『きりすとの涙』 藤原義江　精興社　1968.11.（藤原義江署名入り　150部限定の内の65番）
・『一葉舟』 島崎藤村　春陽堂　1898.6.　初版
・『輿論の法定に訴ふ』 島田三郎　毎日新聞社横濱發賣所　1892.1.（毎日新聞號外）
・”Nine Years in Nippon:　Sketches of Life and Manners” Henry Faulds　Alexander Gardner(London) 1885 1st edition
・”A Selection Songs with Music, for the Sunday-School” Robinson ,Charles S Scribner & Co. 1880
・”HANDBOOK OF ENGLISH-JAPANESE ETYMOLOGY” WILLIAM IMBRIE　小川尚榮堂　1907 第 16 版
・THE BOOK OF PSALMS ENGLISHI AND JAPANESE（英和対照詩篇）　ヘボン訳 YOKOHAMA 1888
・”Nottces CHINESE GRAMMER PART1 ORTHOGRAPHY AND ETHMOLOGY PHILO－SCIENSIS” GUTZLAFF 1842
・英和予備校規則
・東京一致英和学校　明治17年9月改正
・林董書簡　1913年　バタビア日本領事館浮田郷次宛書簡
・小川一眞書簡　九鬼隆一宛
・川合玉堂書簡　和田英作宛
・上杉熊松画幅「上杉鷹山公」
・岸田吟香漢詩幅
・沖野岩三郎手稿『興七の死』(ペン書き1枚　未完)
・岩野泡鳴手稿『華族の家僕』(鉛筆書き1枚　未完)
・島崎藤村　三宅克己　画賛額及び集合記念写真
・国周画　三代目澤村田之助大首絵

歴史資料館購入資料紹介

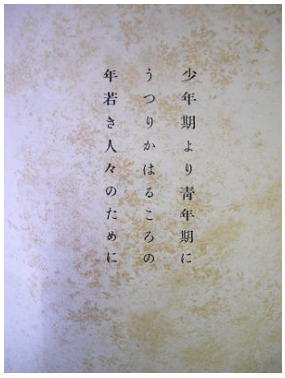
このたび沖野佳子様の寄付金により購入させていただいた『藤村読本』第三巻と同 はしがきの藤村自筆の手稿を紹介したいと思う。

『藤村読本』は全６巻からなり、大正１５年２月５日に研究社より出版された。菊変型判で第一巻２１２頁、第二巻２２４頁、第三巻巻２２２頁、第四巻２１６頁、第五巻２３０頁、第六巻２４２頁からなっている。函入りの本であるが、このたび購入した第三巻は函が欠となっている。装幀・口絵は竹久夢二が担当した(**写真右:第三巻扉**)。装幀については、すべて原案が藤村から出され、表・裏表紙、背の図案と文字の配置、色彩に至るまで、細かい指示を夢二に与え、夢二はその指示に忠実に従って本書をなした。

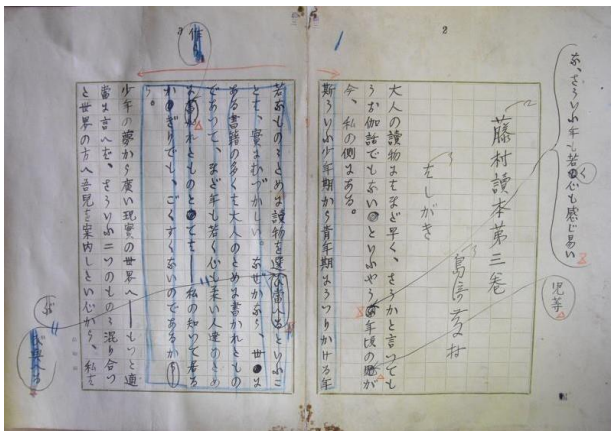


藤村・夢二の緊密な協力なくしては完成しなかった著作である。購入した第三巻は、上述のように函欠ではあるが、本体の状態は、出版後１００年近く経過しているとは思えないほど概ね良好である。（**写真左**）

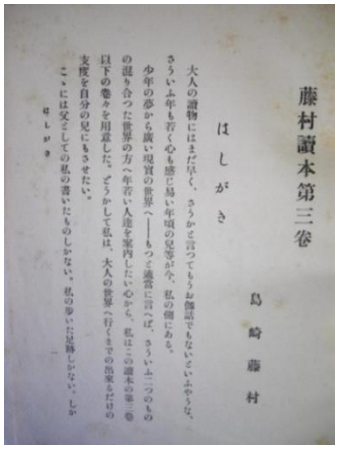
藤村は「少年期より青年期にうつりかはるころの年若き人々のために」（**写真下：第三巻扉裏**）とこの著作全集を編み、第一巻の終わりに次のような一文を載せている。「この読本は今までの私の全著作の中から少年青年の読物に適するもののみを集めた六巻の選集ともいふべきものです。これは四人の兄妹の児に贈りたいと思ふ父のものがたりと、折折の感想や随筆と、旅行記と、詩その他を集めたものではありますが、私の子供と同じ年頃の少年青年諸君が学窓や家庭での友としていただきたいと思つて、さういふ心持でこれを編みました。」そして各巻のはしがきに、その巻の編集方針というべきものを記していている。したがって『藤村讀本』第三巻はしがき手稿は、第三巻の編集方針を記すべくしたためた原稿が、原稿という段階から完成本に掲載されるまでどのような過程を経たのかを、比較対照して知ることができる貴重な資料ということになる。


少年期より青年期に
うつりかはるころの
年若き人々のために

はしがき手稿は島崎藏と印字されている原稿用紙、右面、左面それぞれ２０字×１０行、計４００字詰め原稿用紙３枚にわたって黒インクによって記されている。原稿用紙には濃紺の色絵筆で原稿用紙に１，２，３の番号を振っているが、これはおそらく藤村が推敲の最後の過程で記入したものではないか。また、１枚目右面から２から始まる番号が通して６までスタンプされている。藤村は濃紺色鉛筆で付番したことを考えると、編集者がスタンプしたのではないかと考える。また原稿用紙中央上部には”藤三”との紫色インクによるスタンプがある。おそらく『藤村讀本』第三巻のことを指しているのだろう。


藤村讀本第三巻
島崎藏村
はしがき
大人の讀物にはまだ早く、さうかと言つてもうお伽話でもないさいふやうな、
さういふ年も若く心も感じ易い年頃の兄等が今、私の側にある。
少年の夢から廣い現實の世界へ――もつと適當に言へば、さういふ二つのもの
の混り合つた世界の方へ年若い人達を案内したい心から、私はこの讀本の第三巻
以下の巻々を用意した。どうかして私は、大人の世界へ行くまでの出來るだけの
支度を自分の兒にもさせたい。
こゝには父としての私の書いたものしかない。私の歩いた足跡しかない。しか

この手稿（**写真上：手稿一枚目**）を見るとき、藤村は２回の推敲をしていることがわかる。最初は黒インクにより初稿とも言うべき文章を書いた。その後、１回目の推敲として、同じく黒インクによって表現の修正などを加えている。１回目の原稿用紙の枠外に記した推敲後の文章が正しく挿入されるように赤鉛筆により△、⧖という記号を用いて指示を与えている。２回目の推敲としては、文章の長さを調整しているようで、削除する箇所を濃紺色鉛筆で示し（囲む、縦棒を引く）、文章を、あるいは段落としてつなげる場所を赤鉛筆で指示している。このあたり、藤村の几帳面さを垣間見るような感じである。当初、藤村は行数で４３行あまりの分量で記したが、２回の推敲を経て２４行あまりの分量まで圧縮している。こうした点からも言葉を吟味し、伝えるべきことを端的に伝えようとする藤村の思いを感じ取ることができる。（**写真下：『藤村讀本』第三巻はしがき1頁**）


藤村讀本第三巻
はしがき
島崎藏村
大人の讀物にはまだ早く、さうかと言つてもうお伽話でもないさいふやうな、
さういふ年も若く心も感じ易い年頃の兄等が今、私の側にある。
少年の夢から廣い現實の世界へ――もつと適當に言へば、さういふ二つのもの
の混り合つた世界の方へ年若い人達を案内したい心から、私はこの讀本の第三巻
以下の巻々を用意した。どうかして私は、大人の世界へ行くまでの出來るだけの
支度を自分の兒にもさせたい。
こゝには父としての私の書いたものしかない。私の歩いた足跡しかない。しか
はしがき

この『藤村讀本』第三巻と第三巻はしがき手稿は、セットで購入することができた図書および資料である。それゆえ藤村の当初のはしがき文章構想と印刷され出版された本を比較することが可能となった。このようなきっかけを作ってくださった沖野佳子様に改めて感謝を申し上げたい。

〔参考文献：『藤村書誌』伊東一夫編/国書刊行会/１９７３年〕

2011年度歴史資料館活動

常設展示に加えて、企画展示会、講演会、系列中学校1年生の見学授業、今年度初めて取り組んだ近隣小学校児童の見学授業など種々の活動を行いました。

■ヘボン博士没後100年　記念企画展示会

4月　1日（金）　大学入学式《東日本大震災のため中止》
4月　4日（月）　大学入学式《東日本大震災のため中止》
4月　7日（木）　明治学院高校入学式
5月28日（土）　戸塚まつり
7月17日（日）　白金オープン・キャンパス
8月　6日（土）　横浜オープン・キャンパス
8月27日（土）　白金オープン・キャンパス
10月29日（土）　2011年度校友の集い（記念館2階）
11月　1日（火）～3日（木）白金祭・東京都文化財公開日（東京都文化財ウィーク）

■歴史資料館訪問・交流行事

9月14日（水）歴史的建造物見学ほか（明治学院中学校1年生訪問）
11月　5日（土）歴史的建造物見学及び礼拝堂でのオルガン演奏（港区内小学校3校4年生訪問）

■歴史資料館講演会　ヘボン博士没後100年を覚えて
（キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会共催）
『アメリカのヘボン-イースト・オレンジにおいて-』
日時：11月19日（土）14:00－15:30
場所：記念館1階小チャペル
講演者：Dr. Hideo Watanabe（渡辺英男）
William Paterson University, NJ, USA

■島崎藤村生誕140年　企画展示会

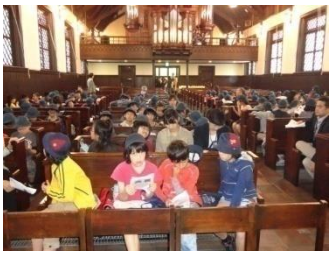
3月10日（土）　明治学院高校卒業式
3月15日（木）　大学卒業式
3月16日（金）　大学卒業式
3月24日（土）　白金オープン・キャンパス

■歴史的建造物見学及び礼拝堂でのオルガン演奏（港区内小学校3校4年生訪問）■

明治学院大学地域連携促進室および広報室、学校法人明治学院歴史資料館等が組織の枠を超えて初めて企画した行事です。当日は明治学院白金校舎近隣の小学校3校の4年生と引率の先生、あわせて約180名が来校し、明治学院の歴史的建造物3棟（明治学院記念館、明治学院礼拝堂、インブリー館《明治学院旧宣教師館》）見学と礼拝堂でのオルガン演奏鑑賞（オルガンミニコンサート）を行いました。

初めて中まで入った歴史的建造物に目を輝かせて見入っている表情、こどもたちがよく知っている曲、そしてこどもたちの小学校の校歌のオルガン演奏を楽しそうに聴いている表情、さらに実際にオルガンに触れてみた時の驚きの表情、それらは事前準備段階での心配をすべて吹き飛ばしてくれました。

明治学院および歴史資料館が地域に開かれた存在として地域に貢献していくためにも、このような活動がますます大切になってくるだろうと感じました。



□2011年2月下旬より3月初旬にかけて『明治学院百五十年史』執筆のための資料調査・蒐集のため編集委員が渡米し、多くの収穫を得て帰国しました。ここにその成果の一端を報告していただきました。

アメリカ史料調査出張報告

辻　直人（『明治学院百五十史』編集委員）

2011年2月26日から3月6日に、『明治学院百五十年史』のための史料調査をしに、中島耕二委員と共にアメリカへ出張してきた。調査の目的は、明治学院に関わりの深い長老・改革教会宣教師に関する史料の収集であった。従来の年史では、明治学院の草創期を支えたヘボン、ブラウン、フルベッキらがよく登場するものの、それ以降の宣教師については十分に触れられてきたとは言えない。今回の調査では、若い世代の宣教師を中心に大量の新史料を発掘することができ、非常に実りの多い出張となった。現地の史料館のスタッフ等から献身的な協力を得ることができたので、今後ともこの人的つながりを大切にして、年史編纂や研究に活かしていきたい。紙面の関係上調査内容全てを紹介することができないが、調査の概要を紹介したい。

今回訪問した場所は、ニュージャージー州にあるオールド・バーゲン教会、ニューブランズウィック神学校、ラトガース大学、プリンストン大学、プリンストン神学校、ミシガン州ホランドにあるホープ・カレッジ（ジョイント史料館）及びウェスタン神学校であり、その他ヘボンやアメルマンなど宣教師たちの旧居や関係教会も訪問した。

調査初日（2/27）は日曜で大学図書館が閉まっていたため、ジャージーシティ近郊にある宣教師旧宅や教会をめぐることとした。改革教会宣教師アメルマンの旧居（**写真右**）は、現在Bloomfield Collegeの施設として使われていることが判明した。井深梶之助もここを訪問した記録があり、当時の家が残っていたことは感慨深かった。また、アメルマンが来日直前まで牧師を務めたオールド・バーゲン教会では、アメルマンを牧師として招聘することを記したアメルマン宛の書簡が奇跡的に見つかり、歓声に沸いた。

ヘボンの墓参（明治学院による記念碑がある）も行い、ヘボンの帰国後亡くなるまで住んでいた旧居の現存を確認して、更にヘボンが晩年通ったブリック長老教会を訪問した。建物は残っていたものの現在は長老教会でなく、アフリカン・アメリカンの教会 Temple of Unified Christian Brick Churchに変わっていた。礼拝堂内部も改修工事中で往年の面影はなかった（**写真下**）。20年前に中島委員が同教会を訪問した時には、図書室にヘボンの肖像が掲げられていたそうだが、その写真の行方も残念ながら分からなくなっていた。

翌日からは3か所の大学と神学校で史料を閲覧した。ラトガース大学での大きな発見だったのが、ダルイー（Eugene Duryee）に関する史料だった。ダルイーは1926年から1931年まで明治学院中学部、高等学部、高等商業部教師を務めた。在任中は明治学院に居住し、英語などを教えていた。ダルイーによる明治学院の様子（授業やクラブ活動などについて）を記した新聞記事も保管されていた。彼はラトガース大学出身の最後の日本派遣宣教師と考えられる。ニューブランズウィック神学校では、特に戦前戦後に明治学院やフェリスで活躍したシェーファー（Luman J. Shafer）関係史料を多数収集できた。

プリンストンでは、元国際学部教授ヤング先生（現在プリンストン神学校教授）の協力を得て、大学図書館では中学部で教べんを執ったスミス（John C. Smith）等、よく知られていない宣教師について手分けして史料調査を行った。同神学校では、O.M.グリーン（Oliver Olsmby MaClean Green）など今まで顔が知られていなかった宣教師の写真を得られたことは、大きな収穫であった。また、神学校から車で数分の場所にある石本三十郎の墓（**写真上**）を訪問する機会も与えられ、しばしの間、明治学院から遠いプリンストンの地で命を落とした一青年への思いをはせることができた。

ミシガン州のホープ・カレッジ内にあるジョイント史料館では、改革教会宣教師に関する貴重な史料を多数発見することができた。1886年以降、ホープ・カレッジ出身の明治学院に関係する宣教師15人の史料を閲覧した。中でも、スタウトの九州伝道を助けたピータース（Albertus Pieters）、戦後明学の国際交流に尽力したヴァンワイク（Gordon Van Wyk）など、多数の箱に個人史料が保管されていたのは驚きだった。ヴァンワイク史料には白金通信などの明治学院関係文書や明治学院大学の学生からの寄せ書きも含まれていた。デマーグ（John C. DeMaagd）は戦前明治学院で教えていたが、戦後は横浜を中心に復興事業や教会建設にも尽力しており、多数の貴重な写真を所蔵していた。1910年から9年間東山学院院長を務めたワルボールド（Anthony Walvoord）の史料ファイルには、写真を多く含む数多くの未出史料があったが、東山学院について百五十年史の中でどう扱うか再議論が必要と感じた。

明治学院の外国人教師は、大正期以降は長老教会宣教師に代わって、ほとんど改革教会宣教師が担い、かつラトガース大学とニューブランズウィック神学校出身者が激減し、その多くがホープ・カレッジ及びウェスタン神学校出身者と変化している。恐らくラトガースが時代と共に世俗化したことも関係しているだろう。一方、長老教会が明治学院に宣教師を送り込まなくなった理由は何だったのか、これは新たな課題として検討が必要である。

最終日には、予想もしていなかった出来事があった。ウェスタン神学校図書館で、元日本宣教師のヘッセリンク先生と面会することができたのである。先生はとても親身に、ご存命の宣教師に関することなど貴重な情報を教示してくださった。

やはり歴史研究は文書史料だけでなく、実際の住居、通っていた教会、墓地、出身大学など現地に行ってみることが大切であると痛感した。最後に、この調査で協力を戴いた皆さんに深甚の感謝を表したい。

*本報告は、中島委員と相談の上、『明治学院百五十年史』編集委員会で報告したものを再編集したものである。より詳細な内容については、歴史資料館に報告が保管されているので、問合せられたい。

（歴史資料館研究員、北陸学院大学短期大学部准教授）

□２０１１年度歴史資料館活動で特筆すべき事柄は、学芸員資格取得のための授業科目である「博物館実習」の場として歴史資料館が活用されたということです。また学年度末には履修学生が企画した展示会も行われました。大学の授業と学内機関である歴史資料館が連携することの意味は大きいだろうと考えます。

歴史資料館所蔵資料を「活用」する――博物館実習での試み

熊澤 弘（芸術学科非常勤講師）

明治学院大学文学部芸術学科では、学芸員資格取得のため、博物館学関連講座が開設されている。その中で、学部最終学年に履修する「博物館実習」は、それまでの講座で学んだ智識や技術、理論を踏まえながら、様々な種類の「博物館資料」の取り扱いを学ぶ場であり、美術館・博物館において調査・研究する「学芸員」としての実務能力を修得するトレーニングとして重視されている。勿論、この課程を一通り経験しただけで学芸員としての能力が出来上がるわけではない。ただ、実際に資料／史料という「モノ」に触れ、考察する体験を通してしか、博物館資料を取り扱う能力は向上してゆかない。それは、実習を担当した私が、美術館での実務体験から実感することである。

このことを踏まえ、2011年度の「博物館実習」は、「モノの取り扱い」体験を重視した授業を行うこととし、学院内外の様々な機関の協力を仰ぎながら、履修者たちに様々な種類の博物館資料に触れる機会を作っていった。そしてこの実体験重視の実習の拠点となったのが、明治学院歴史資料館であった。

1998年の設置以降、歴史資料館は明治学院史に関する様々な資料を所蔵し、学院内外の学究活動を支援する地道な活動を続けている。所蔵品には、書簡や日記、原稿などの文書類、様々な写真など、学院にゆかりの人物の活動を伝える貴重な資料が数多く含まれるが、これらを、博物館学的な意味での「モノ」として活用し、同時に学院の授業で使用する機会は、殆どなかったという。本年度の博物館実習では、これらの資料を実際に取り扱うこととした。このことは、学生にとっては、全く未知数の「モノ」に触れ、考察する機会を得たことを意味しており、実践的な資料調査を行う機会として絶好のものとなったと言

える。

今年度の実習では、近年収蔵された書簡資料や写真群を調査対象とした。学生は調査対象の状態チェックをしながら、資料に関する情報（サイズ、年代、内容など）を記述しながら、その歴史的意義を理解していった。学生諸氏は、実物に触れる体験を通して、博物館資料という「モノ」を調査する意義を実感したことであろう。なお、彼らの資料調査の成果の一端として、平成23年度末から24年度初頭には歴史資料館で資料展示を行っている。おりしも2012年は、普通学部第1回卒業生である島崎藤村（1872－1943）の生誕140年にあたる。この機会に、歴史資料館の資料と、その資料を教材として活用した学生の研究成果の一端をごらんいただければ幸いである。

明治学院には、歴史資料館は勿論、数々の英語学教育資料を有する大学図書館、敷地内に保存されている歴史的建築物など、博物館学的、文化財学的な視点から見て興味深い「モノ」が豊かな環境にある。2011年度には博物館実習でこの資料を活用する機会を得たのは、学生のみならず、指導を担当した私にとっても、得がたい体験となった。この実習の機会を開いてくださった歴史資料館の稲垣さん、小杉さんには心より感謝申し上げる。

（武蔵野音楽大学専任講師／東京藝術大学大学美術館非常勤講師）

博物館実習学生による展示会のための作業が、学年度末に行われ、展示物をどのように展示すると良いのか、展示ケースに何度も置き直しながら作業をしました。展示ケースガラスも曇りがないように、丁寧に何度も磨いていきます。展示品説明のためのキャプション、展示品目録なども学生たちが工夫して作り上げました。

博物館実習履修者による授業成果としての展示会は以下のとおり開催されます。

島崎藤村生誕140周年記念

歴史資料館所蔵史料でたどる 明治学院の先人たち ―藤村・井深・三宅を中心に

期間：2012年3月1日（木）～4月7日（土）〔休館：日曜日〕
時間：9：00～16：00　但し、3月3日、17日、31日の土曜日は休館とさせていただきます。
場所：明治学院歴史資料館（明治学院白金校舎）

展示企画：2011年度博物館実習履修学生（展示指導：熊澤弘先生）

《学生たちの一言》◆歴史資料館での作業を通して、講義で聞いたことを実体験でき良い機会となった。◆歴史資料館という場所が学内にあることを全く知らずに過ごしてきて、実習を機会に学校の資料に触れることができたのは貴重な体験になった。◆展示をするには、見る人の目線を考えなければならないという、当たり前だけど大切なことを実感することができた。

□2004年以降、刊行してまいりました歴史資料館資料集、2010年3月に初めての取り組みとして作成しました歴史資料館グッズの紹介をさせて頂きます。

明治学院歴史資料館資料集既刊紹介 ――――――

第一集「井深梶之助　生誕150周年記念号」

明治学院第2代総理井深梶之助生誕150年・没後60年の節目にその足跡を多面的にたどる。

定価:本体1，000円＋税(2004年11月刊)

第二集『明治学院九十年史』のための回顧録

明治学院の各時期の教育実態を内側から明らかにする貴重な証言。『明治学院九十年史』に収録できなかった貴重な『明治学院外史』としての一巻。

定価:本体1，000円＋税(2005年3月刊)

第三集『ヘボン資料集』

村上文昭著『ヘボン物語 － 明治文化の中のヘボン像』(2003年教文館刊)の姉妹版。前掲書に収録出来なかった多数の資料を掲載。

定価:本体1，200円＋税(2006年3月刊)

第四集『精神的基督教』

木村駿吉編『精神的基督教』(明治23年10月刊の復刻版)明治学院で開催され、島崎藤村も参加した基督教青年会主催第二回夏期学校の講演記録。

定価:本体1，000円＋税(2007年3月刊)

第五集『戦前・戦中・戦後の明治学院』

戦前・戦中・戦後を学院で生きた教師・学生の証言。定価:本体1，000＋税(2008年3月刊)

第六集『アメルマン・フルベッキ・ブラウン・ヘボン・J.H.バラ資料集』

来日初期宣教師の記録。”Sketch of Japan Mission, by Amerman” および”Biographical Sketches.”の翻訳と原典復刻。

税込定価:1，000円(2009年3月刊)

第七集『昭和三〇・四〇年代の明治学院事情座談会』

昭和三〇・四〇年代を学院で過ごした同窓生の座談会記録と金井信一郎・森井眞 本学元学長お二人の回顧談。

税込定価:1，200円(2010年3月刊)

第八集『朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』

明治期に明治学院に学んだ留学生5名の文学作品の翻訳および解題と東アジア圏留学生名簿を所収。

税込定価:1，000円(2011年3月刊)

第九集　ORATORIO JOB　COMPOSDE BY SEIGI ABÈ

本学でも教鞭をとった讃美歌「馬槽(まぶね)のなかに」の作曲者として知られる安部正義が旧約聖書「ヨブ記」を題材に作曲したオラトリオ『ヨブ』についての論考とともに、ヴォーカルスコア（ピアノ伴奏譜・再版）と初演ライヴＣＤを付属資料として所収。

税込定価：2，000円（2012年3月刊）

歴史資料館グッズ ――――――

一筆箋　白金の丘の風景　第一集～第四集

(縦書き版、横書き版:税込み各150円)

第一集　明治学院記念館　　第二集　明治学院礼拝堂

第三集　明治学院記念館　　第四集　インブリー館

2010年度末に作成し、好評でありました一筆箋の第一集、第二集を2011年度内に増刷いたしました。加えて新シリーズ第三集、第四集も作成いたしました。2012年度には資料館グッズの新企画も用意されています。ご期待ください。

発行者:明治学院歴史資料館長　辻泰一郎
発行年:2012 年 3 月 31 日
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
電話・FAX:03-5421-5170
E-mail:siryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
http://shiryokan.meijigakuin.jp/